

エンパワメントとグループワーク

東北福祉大学・総合福祉学部 黒田 文(会員番号002095)

キーワード：エンパワメント、意識化、グループワーク

1 研究目的

エンパワメントは、ソーシャルワーク実践の核となるものであり、ジェネラリスト実践の中心的概念の一つである。ジェネラリストソーシャルワーカーがエンパワメント・アプローチを採用するのは、ソーシャルワーク・サービス利用者の多くは社会的抑圧を経験しており、エンパワメントを基盤にした援助を通じて、サービス利用者が潜在的な社会生活機能を発揮していくことが、社会的公正・正義を増進するソーシャルワークの目的に合致するからである。

本発表では、エンパワメントの考え方とグループワーク実践との結び付きについて整理することを目的にした。その理由として、我が国における先行研究ではエンパワメントとグループワークとの関連を検討したものが非常に少ないと認識するからである。よって、エンパワメントの考え方を整理しながら、エンパワメントを意識したグループワーク実践の姿を捉え直す。

2 研究の視点および方法

学術誌 "Social Work with Groups" より、タイトルに "エンパワメント" が付与されている論文を収集した。そのうち、援助方法論として論じられている論文を主要な第一次資料として選定し、第一次資料の所見を通じて文献の再収集を行った。同様の収集を繰り返し、本発表の論旨の骨格を形成するための資料を追加、精読する作業を通じて、グループワーク実践とエンパワメントとの結び付きについて整理した。

3 倫理的配慮

本研究に際しては、日本社会福祉学会研究倫理指針を遵守した。

4 研究結果

以下、エンパワメントに関する議論、意識化の過程、エンパワメントとソーシャルワーク、エンパワメントを意識したグループワークの順に述べる。

エンパワメントに関する議論

エンパワメントを過程と捉えるか成果と捉えるか？エンパワメントを過程と捉えるか成果と捉えるかで議論は交わされてきた（Bernstein et.al 1994; Parsons1991; Rappaport 1984）。



- Gutierrez 1995; Kaminski, Kaufman, Graubarth, & Robins 2000; Simon 1990; Zimmerman 1995

第一義を「過程」と捉え、抑圧された立場におかれた自らがパワーレスな状態にあることに気づき、自分の存在や権利にまつわる内的認識を形成・変容していく「過程」をエンパワメントとみなす。

- Rappaport 1984; Staple 2000

過程と成果の両方によってエンパワメントを論じる内容もある。

- Zimmerman (1995) の下記の解釈によれば、エンパワメントにおける過程と成果の議論は、同語重複的な面があると指摘される。

"どのように、人々、組織、コミュニティがエンパワーされるかという過程は、その過程でエンパワメントによってもたらされた某かの結果があり、その結果が過程となって連続することである (p. 583.)"

- Rappaport 1987

エンパワメントには、人々が自分の生活に対して自らのコントロールがきいているという実感が伴い、社会参加を行うことなどを通じて、環境へ働きかけることができるという感覚が伴うと考えられる

この考えの根底には、現実世界を変革するには、まず、世界に関わっているその人の意識の改革が必要であるという Freire (1970) の思想が受け継がれている (Lee 2001)。



意識化 (conscientization, consciousness raising) と呼ばれる作業過程が必須。意識化は、心理的な側面と社会・政治的な側面の双方で意識の改革が進められねばならない。

■ Gutierrez 1994, 1995

意識化は行動としてのソーシャル・アクションを先行する要因と指摘。

意識化の過程 (Freire 1970, 1993)

- 1) 自分の課題と思っていたものが、社会、政治、経済、文化などの側面とどのように関連しているか、その様式/有り様に気づくこと
- 2) 個人的な事柄だと思っていた内容と政治的な事柄について、そこに働いている力関係にどのようなものがあるか・起きているかに気づくこと

エンパワメントでは、それまでのナイーブな意識から脱し、力の作用に対する批判的な意識化を身につける過程が必要。その帰結として、環境へ働きかける集合的なアクションを起こし、自分たちに必要な環境資源へアクセスできる状態となること（それまでは必要な資源にアクセスすることが阻まれていた）を目指す。

■ Breton 1994; Carr 2004; DuBois & Miley 2019; Gutierrez 1994; Lee 2001

個人の意識的な変容だけが起こっても、それに社会・政治的な変容が付随しなければ、真のエンパワメントとはみなされないと考えられる。

換言すれば、自分自身の生活世界について、どのように考え、感じるに至ったか、実際に変化を起こそうとどう行動したか。行動へ向けて力 (power) を使わなければ、その人自身の能力への気づき・意識化は、エンパワメントされた "感じ" でとどまっているに過ぎない

エンパワメントとソーシャルワーク

世界を抑圧された認知構造によって眺めるようになった人々に必要な変化をおこす
= 抑圧された心理・認知的内容だけではなく、その認知構造の変容から導かれた現実的行動様式

- 両者のコンビネーションへ目を向けサービスを提供する必要がある。ソーシャルワークは、利用者自らの環境を理解し、そこへ働きかけて、影響を行使する力 (パワー) を高める援助

ソーシャルワーカーとして

■ Rappaport 1981

"権利を教えながら、権利を行使するための資源やサービスがないのは
とんでもない残酷なジョーク"であることを認識する

エンパワメントを意識したグループワーク

- 1) 抑圧的な認識・認知構造をグループに参加することを通じて変えること
- 2) その認知変容に付随した行動を身につけること
- 3) その行動により社会変化へコミットすること

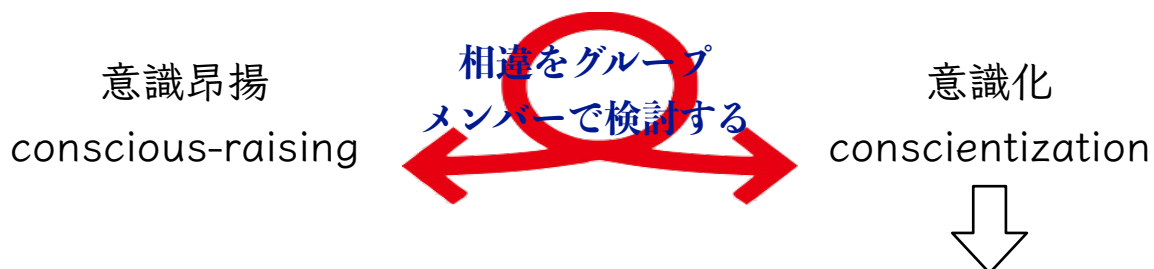
エンパワメント概念が明確にグループワークへ適用されたのは、1983年に開催された第5回AASWG (the Association for the Advanced of Social Work with Groups) の年次シンポジウムにおいてである (Lee 2001)。

■ Pernell 1986

グループワークがエンパワメントを実践するための自然な媒体であると言及している。その理由は、グループワークに参加することで備わるリーダーシップ、メンバー間の相互扶助を通して得られるパワーの獲得はグループワーク固有のもの

5 考察

グループにおいて、メンバー間の協力・相互扶助を基盤として、個々がこれまでの生活経験を通じて、形成・内在化している抑圧的な認知構造を洗い出し、その変容へむけた試みを行うことは十分に可能。グループメンバーが、共にサポートイブな存在として現実に目の前にいることが大事であり意味が大きい。



自らが許容できる生活、それに必要となる環境資源へのアクセスと使用の状況を問題にする→コレクティブ・アクション

グループワーク実践では

- グループワークで"私たちの中にある強さ"を確認する
- ソーシャルアクションへの繋げる実践を意識する
- ソーシャルアクションに着手することのコストと現実を認識する

【リアリティ・チェックの実践】

(Breton 1995; Cohen & Mullender 1999; Jacobson & Rugely 2007; Staples 2009)

コミュニティにどれほど協力してもらえるかを知ることが大事
(何も自分たちだけで実行するのではないこと、やらねばならないのではないこと)。



具体的なアクションは何か、それに要するコスト（エネルギー、時間、予想されるコンフリクト、アクションをおこす連続・結果として現れるアクション）を見積もり対応する。

これらの具体的な内容についてメンバー間で意見が交換され、実行性について民主的に意志決定をしていかなければエンパワメントにはならない。



コミュニティと協力関係を作るための実践がエンパワメントになる。協力を得られればコストの低減になる。



時間をかけて変革をするのが通常プロセス

- エンパワメントを意識したグループワークは、長期にわたる実践
- コミュニティがセーフガードになるように繋ぐ